

研究主題 高等学校古文における条件表現の指導における考察

要約：高等学校古文では条件表現として、「未然形+ば」で表現される仮定条件と、「已然形+ば」で表現される確定条件があり、確定条件は原因理由・偶然条件・恒時条件を表現する。この確定条件について、原因理由と偶然条件の解釈の区別の難しさの原因を探ることを端緒としていくつかの指導上の問題について考察し、古文、古典の学習における現代語訳の意義などを明らかにする。

キーワード：条件表現 確定条件 原因理由 偶然条件 恒時条件 連続性 現代語訳の意義

第1章 条件表現について

古代語から近代語の変遷の中で、条件表現の体系は極めて大きな変動を生じる。順接仮定条件の場合、古代語で「未然形+バ」の形で表現されていたものが、近代語において消滅し、もともと確定条件の表現形式であった「已然形+バ」の形が仮定条件を表現するようになる。その結果、古典文法で「已然形」と呼ばれていた、その同一形態が、口語文法においては普通「仮定形」と呼ばれるようになった。

古代語について、松下大三郎氏は順接条件にあたるものを「拘束格」と呼び、仮定（未然仮定 現然仮定）・確定（必然確定 偶然確定）と分類、阪倉篤義氏は二つの事態の因果関係の強弱によって仮定と確定とを捉え、確定条件（偶然条件、必然確定、恒常確定）・仮定条件（偶然仮定、必然仮定、恒常仮定）とに分類、小林賢次氏は仮定条件（完了性 非完了性）・恒常条件・確定条件（必然確定 偶然確定）と分類している。この3氏の分類は、どのような立場で分類するかによって異なってくる。ただ、3氏においては、「已然形+ば」を大きく三つに分類することは共通している。これらを、現在高等学校で使用される古典文法で言うところの原因理由（…ノデ…カラ）、偶然条件（…ト…（タ）トコロ）、恒時条件（…トイツモ）に照らし合わせても、これらは必ずしも完全に一致するものでない。言葉は、意味の境界において明確な区別をしない、連続的な部分を有するのである。この連続性は言葉の他の側面でも同様である。連続性を持つ言葉を、人為的に区切り、分類しようとするときは、その区切る立場の者の言語観によって分類の結果が異なってくる。そして、その区切りは完全な分離をなすものではないのである。

第2章 確定条件における原因理由と偶然条件

第1節 確定条件における原因理由と偶然条件

生徒が古文を現代語訳するとき、確定条件について、「確定条件の原因理由と偶然条件が分かりにくい。」と言う感想を耳にする。比較的理理解のある生徒でも、確定条件の原因理由と偶然条件は区別がしにくいようである。なぜ、区別が難しいのか、明確に区別する方法はないかということが問題となる。

第2節 確定条件の現代語訳について — 『竹取物語』の場合—

『竹取物語』においては、確定条件の「已然形+ば」の例は、「用言+ば」47例、「用言+助動詞他+ば」65例が見られる。それぞれを詳しく見てみると、「用言+ば」47例中、原因理由 13例、偶然条件

13例・恒時条件 5例、考慮の余地があるもの 16例、「用言+助動詞他+ば」65例中、原因理由 55例、偶然条件 5例、恒時条件 1例、考慮の余地があるもの 4例であった。偶然条件か原因理由か、どちらの場合であるか考慮の余地があるものは合計 20例である。例えば

○翁喜びて、家に帰りてかぐや姫にかたらふやう、「かくなむ御門の仰せ給へる。なをやは仕うまつり給はぬ」と@言へば、かぐや姫答へていはく、「もはら、さやうの宮仕へ仕うまつらじと思ふを、しみて仕うまつらせ給はゞ消え失せなんず。…」

この場合、翁が、どうしてお仕え申し上げないのかと「言ったので」、かぐや姫が返事をしたと解釈されるのであれば原因理由となる。また、翁がどうしてお仕え申し上げないのかと「言ったところ」、かぐや姫が返事をしたと解釈するのであれば偶然条件であると考えられる。

しかし、実際はこの判断は容易ではない。特に、物語において、人物Bの動作bが、人物Aの動作aから当然引き起こされるものであるか、否か、順当な物語の展開、意外な物語の展開など様々なバリエーションの展開の中で判断することは難しい。まして、動作aが発話動作であり、しかも、人物A、人物Bの間に微妙な心理的關係、かけひきがある場合は更に困難になる。丁寧に、前後の文脈を読み、解釈する必要があるのは当然だが、それでも、なお用例によってはどちらか一方と決めきれないことになる。

ところで、生徒の現代語訳について、文脈をしっかりと読んでおくことにより、原因理由か偶時条件かを明確にできるものの例として一つ、以下の文章を挙げる。

○世の人世の人、「あべの大臣、火ねずみの皮衣もていまして、かぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいます」など問ふ。ある人のいはく「皮は火にくべて焼きたりしかば、めらめらと焼けにしかば、かぐや姫あひ給はず」と言ひければ、…

この場合、波線部「皮は火にくべて焼きたりしかば、めらめらと焼けにしかば」を、文脈を考慮せず、部分的に、逐語訳をとする。通常の衣服は火をつけると「めらめらと燃える」のであるから「皮は火にくべて焼いたのでめらめらと焼けた」と解釈して原因理由との現代語訳をしてしまいそうである。しかし、この「火鼠の皮衣」は直後の本文にある通り「火に焼けぬ」皮衣である。「火に焼けない」という前提の毛皮が焼けたのであるから、ここの訳は（意外性を含んだ）偶然条件と解釈されることになる。

これは、生徒の古文における「現代語訳」、「内容理解」、「文法的理解」という三者の緊密な関係の必要性を示すものである。現代語訳は、ただ単に古文を現代語に置き換えるということではない。文法的理解を助けとして内容を理解し、現代語に改めるのである。勿論、現代語に改めることによって理解することもある。どちらが先であるかという問題は問題ではない。「現代語訳」の為には「内容理解」や「文法的理解」は緊密な関係をもっており、三者はどれも不可欠なのである。勿論そこには、どの程度に取扱い、そのバランスをどうとるかは考慮が必要である。

第3節 原因理由、偶然条件、恒時条件の連続性

山口堯二氏(1966)では、已然形に接続助詞「ば」が接続する場合の用法として①前句が後句に対して確定的な条件を表し、後句と必然的な因果関係に立って、「…ので」「…から」と訳しうる意味を表す場合、②前句は後句に対して確定的な条件を表すが、後句との関係は偶然的で、「…と」「…たところか」と訳しうる意味を表す場合、③前句が後句の恒常的な条件を表し、前句の条件がそなわれれば常に後句が成立するという関係で、「…時は必ず」と訳しうる意味を表す場合、の三点を挙げている。そして、「已然形+ば」の用法も本来は、原因・理由を表す必然確定にあったのであり、「已然形+ば」は必然確定(原因理由)から偶然確定(偶然条件)へとその因果関係の幅が広がっていったというのである。そして、それは、恒時条件への用法のつながりへと続いていく。

「両句の事態が必然的な関係を持ち、前句が後句の原因理由になっていると見られる場合でも、因果関係に重点を置く表現と見るか、継起的展開関係に重点を置く表現と見るかによって、『…ので(から)』とも、『…と』とも訳しうる」のであり、「この両者の区別は、『已然形+ば』の用例を検討してみるに、必ずしも明確なものではない。同じ用例が人によって『…ので(から)』と訳されたり『…と』訳されたりする場合が少なくないのである」とことについて、「…具体的な表現においては、両句の関係が必然か偶然かは、因果関係の程度の差の問題になるようであるが、だとすれば、①(原因理由)と②(偶然条件)の用法も、相対立するというよりは、連続して考えられるものでなくてはならない。」としている。

そうであるならば、確定条件の原因理由と偶然条件の解釈は、明確に区別できる場合は区別する必要があるが、どちらか考慮の余地があると考えられる場合は、明確に区別してしまおうと努力する必要はないことになる。勿論、原因理由の場合であるのか、偶然条件であるのかを検討することは、古文を解釈しようとする点では有益であるが、明確に区別しきってしまおうとすることは、却って、古文の不明確さとなって、古文学習の障害となるのではないか。明確に示せないものもあることをきちんと示し、その理由を説明し取り組むほうが言葉の特徴を学ぶ良い機会となるのではないだろうか。

第3章 生徒の確定条件の現代語訳例について

第1節 生徒の確定条件の実際の現代語訳例

実際の生徒の現代語訳について検討する。対象は筆者の勤務先である石川県立門前高等学校の「古典」の授業を選択している2年生、3年生である。なお、現代語訳をした例文は『高等学校標準古典』(第一学習社)の教材の中の散文作品の中の用例をばらつきのないように筆者が選択したものである。その中で見られた6パターンを以下に挙

げる。

①「ならば」や「なら」で口語訳するパターン

○いみじう額つき行ひて、寝たりしかば(寝たところ)、御帳の方よりいみじう気高う清げにおはする女の、うるはしく装束き給へるが、奉りし鏡をひきさげて、『この鏡には、文や添ひたりし。』と問ひ給まへば、…

・生徒現代語訳例 → 「寝るなら」

②「たら」と訳するパターン

○『この鏡を、こなたに映れるかぜを見よ。これ見れば(見ると)、』

・生徒現代語訳例 → 「これを見たら」

③「エ段音+ば」で訳するパターン

○いま片つ方に映れるかぜを見せ給へば(見せなされたところ)、御簾ども青やかか、几帳おし出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅桜咲きたるに、鶯、木伝ひ鳴きたるを見せて、『これを見るは、うれしな。』とのたまふとむ見えし。』と語るなり。

・生徒現代語訳例 → 「お見せになれはば」

④接続助詞「て」で訳するパターン

○これを手まさぐりにしつつ行くほどに、蛇一つぶめきて、顔のめぐりにあるを、うるさければ(うるさかったので)、木の枝を折って払ひ捨つれども、…

・生徒現代語訳 → 「うるさくて」

⑤「ときは」で訳するパターン

○二条の後に忍びて参りけるを、世の聞こえありければ(あったので)、せうとたちの守らせ給ひけるとぞ。

・生徒現代語訳例 → 「あったときは」

⑥「～てみれば」「～てみると」と訳するパターン

○『この鏡を、こなたに映れるかぜを見よ。これ見れば(見ると)、あはれに悲しきぞ。』

・生徒現代語訳例 → 「これを見てみれば」

生徒の現代語訳・誤訳の特徴としては

・理解の浅い生徒は「～ならば」や「～れば」が多く、自分の考えられる範囲で機械的に置き換えるようである。文語の已然形「エ段音」を音の共通性から「エ段音」をもつ現代語へと、とりあえず置き換えて、仮定条件の意味を考えていないのではないかと思わせる訳も見られる。

・とりあえず、現代語訳をしているだけで前件と後件の関係を考えていない。あるいは考えられないために、原因・理由、偶然条件、恒時条件の区別をつけられない場合もある。

・生徒は現代語に直す場合、確定条件にかかわらず、現代語となっていないものがある。訳する場合に現代日本語として通用するかどうかにまで、思い至らないことが多いのではないかと。

生徒の現代語訳は、明らかに現代日本語として妥当でないものがある。その場合は、一般に「正しい」現代語訳として、改めるように指導する必要がある。しかし、一概に「間違った」現代語訳とは言いつれない場合もある。この場合「正しい」という認識は、現代日本語として妥当性があり、違和感なく使用できるというものであり、著しく不自然でなく、誤解の余地なく聞き手・読み手に伝わる、一般的な日本語とし社会で使用できる日本語である。

前記の生徒の現代語訳例は、明らかに間違った現代語訳もあり、一

概にそうとも言えないものもある。後者に関しては前述の検討のように個別の検討・確認が必要になる。教科書、文法書が確定条件の訳例としてあげている、原因・理由→「…ノデ」・「…カラ」、偶然条件→「…ト」・「…(タ)トコロ」、恒時条件→「…トイツモ」を外れた現代語訳で、意味がおかしくないもの、通用するものがある。それは前述のように、現代日本語として意味を有することができるものである。

では、教科書、文法書があげる3パターンの訳例と生徒の許容できる現代語訳例のずれは何であろうか。それは、日本語の意味としての限定的使用・個別性とその使用の汎用性とと考えられる。

後者の生徒の訳例は、不適切な部分もあるが、その過程を考えると、その現代語を当てはめた理由を想像できるものもあるが、それは現代日本語の使用という点から考えると、限定的なものである。個別に意味を検討してみると、ある場合には、可能なものであるという程度である。そのため、教材として古文を読み、現代語訳をしようとする場合、多くの文を、多くの生徒と読み進めていこうとする場合には適当ではないということになる。生徒と学習する場合には、限定された条件下では適切な訳になるが、それ以外では使えない現代語訳は避けることが無難である。

そもそも、対象生徒は日本語を母国語とする、日本語のネイティブスピーカーである。外国人のように、言語に対する認識を有するようになってから日本語を学び始めるわけではない。幼児期から育まれた日本語に対する感覚を持ち、それを基本として、多くの場合無意識に日本語を使用している。また、生徒各人が育ってきた言語環境は様々である。小学校、中学校、高等学校での日本語の学習において、ある程度の共通認識は形成されるが、それは完全に重なりあうものではない。そのため、多くの現代語訳のパターンを示すのではなく、教科書や文法書の中で示されているいくつかのパターンを示し、現代語訳を試みさせることが適切であると考え。但し、意識的に直そうとする場合には置き換えただけでは駄目で、現代日本語としてきちんと形になるものになるように考えさせることが大切である。それを考えることは日本語に対する関心と日本語のニュアンスに敏感であろうとする意識を持つことにつながるのではないかと考える。

第2節 「ト」と「トコロ」による現代語訳

「ト」と「トコロ」は「已然形+ば」で示される確定条件の偶然条件の現代語訳例として示される。これは、「…ト」と「…トコロ」の相違が、現在形が接続するか、過去形が接続するかを意味すると考えられる。ところが、吉川武時編(2003)では「臨場感を喚起するという状況提示」という特徴を有しているとしており、その意味では、「ト」より「トコロ」の方が意外性があるということが言える。ただし、「トコロ」はその「臨場感」「意外性」という性質から、繰り返し使用することは難しく、「トコロ」を繰り返した場合には、日本語としての違和感が生じることになる。

第3節 古典文法、口語文法における「未然形」「已然形」「仮定形」

生徒が中学校で学習する口語文法と高等学校で学習する古典文法の活用形には大きな違いがある。それは、口語文法での仮定形が古典文法では已然形であるということである。

古典文法において、六活用形は活用表では「未然形 連用形 終止形 連体形 已然形 命令形」の順で配置され、未然形と已然形、連用形と連体形はそれぞれ、終止形を中心に対比される形で配置されて

いる。確定条件に関しては、仮定条件を表現する「未然形+ば」と確定条件を表現する「已然形+ば」も、この前述の対比からきちんと対応する形になっている。

しかし、口語文法では動詞の活用形は、口語文法では「未然形 連用形 終止形 連体形 仮定形 命令形」の順で配置され、古典文法で見られた「未(いま)だ」「已(すで)に」という対応関係はなくなり、「未然形—已然形」で対比することは難しくなる。

「未然形+バ」は現代文では仮定条件を表現する形式としては(文語的表現を除いて)使われない。古典文法で已然形であったものが、現代語では仮定形となり、仮定条件を表すようになり、「已然形」の名があてはまらなくなった。古典文法で「已然形」と呼ばれていた、その同一の形態が、口語文法においては普通「仮定形」と呼ばれるものになる。口語文法の中で学習した仮定条件は、「未然形+バ」の形で改めて学習することになり、文法の学習が苦手な生徒をはじめとして、口語文法から文語文法へのスムーズな学習に少なからず影響を与えることになる。なお、活用形の名称について、山田孝雄氏(1936)は、活用形の名称は一部の機能を名称化したもので、便宜的なもので、その名称によって意味が限定されるわけではないことを述べており、注意しておく必要がある。

第4節 漢文訓読における条件表現

古文の確定条件に関連し、漢文における条件表現について触れる。

古文では、一部時代の新しいものを除いては、「未然形+ば」が仮定条件を表現し、「已然形+ば」が確定条件を表現するが、漢文訓読の際には、以下の例文のように「已然形+ば」も仮定条件を表現する場合があります。慣用的なものとして説明される。

○子夏問孝。子曰、色難。有事、弟子服其勞、有酒食、先生饌。會是以為孝乎。 『為政』『論語』
子夏孝を問ふ。子曰く、色難し。事有れば(骨の折れる仕事があるならば)、弟子其の勞に服し、酒食有れば(ご馳走があるならば)、先生に饌す。

これはいったいどの時代からなのであろうか。山田孝雄(1936)は、漢文中に用いられる「すなはち」に関して、漢文では仮定条件にある「則」も、「レバ」という「已然形+ば」の形で訓読されることを指摘している。斎藤文俊氏(1987)では、近世における訓読法の変遷について漢文の語法において順接の条件表現によく用いられる「レバ則」と呼ばれる「則」に注目し、文中に「則」が有る場合もない場合も「レバ」(已然形+ば)の訓点が発せられることが多いと指摘している。また、築島裕氏(1967)が「興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳」の訓点についての研究から、平安時代にも「已然形の下についた『バ』は、順接条件を表すのであるが、既定の条件を表すことは殆ど無く、大部分が仮定条件を表している」と述べているように、「已然形+ば」の形式でありながら仮定条件的なものが見られるというのである。

つまり、仮定条件の部分を「已然形+ば」によって読むことは、平安時代の漢文訓読にも遡って見られることなので、近世の訓読法を踏襲した結果とだけは言い切れないようである。

このように、漢文訓読では「已然形+バ」の形であっても仮定条件に解釈されることがある点については、古文と漢文の学習を関係づけて学習し、論理的整合性を求める生徒にとっては疑問となるはずであり、この点を指導者は意識しておく必要がある。この点については歴

史的に、文法的に明確な説明を与えることは難しいが、しかし反対に、この相違に気づかせる学習へと導くことは、言語への関心、国語への関心へと繋がるとも言えるのではないだろうか。

第5節 大学入学試験問題に見られる確定条件

確定条件について大学入学試験問題でどのように扱われているかについて、『全国大学入試問題正解6国語(国公立大編)』(2003~2005)で見てみたところ、国公立大学の入学試験問題は殆ど現代語を求める形式の問題であった。現代語訳を求める問題では、原因理由を問うものが多く、偶然条件は比較的少なく、前記三年分の資料で見ると、三題あった年度もあるが、あとの年度は一題であった。勿論、問題は確定条件の表現を含む古文であり、確定条件の表現が原因理由・偶然条件・恒時条件のいずれであるかだけを問うものではない。しかし、「傍線部を現代語訳しなさい。」という指示であるため、確定条件の解釈は現代語訳の一部となって受験生の解答となって表現されることになり、問題として問われる中に確定条件の表現の解釈が出ることになる。結果として、確定条件の表現の解釈が問われることになる。

原因理由は文の前後の因果関係を表現して話を展開していくことから必要であり、問題文中に登場しやすくなり、その為に前後の話の内容を理解しているかを確認する時には、設問として必要となると考えられる。また、問題としての観点から考えると、解釈の際に、誰が判断しても明確に答えが一つに決定できるものを求められる入学試験問題としては、文脈から比較的的確にその判断がしやすい原因理由を問うと考えられる。

一題の問題の中に原因理由の解釈と偶然条件の解釈を両方問う問題も見られた。これは、他の採点要素(副詞、助動詞、敬語、古語の意味など)があるとしても、確定条件の原因理由と偶然条件の違いを理解していることを確認する問題となっている。

第4章 学習における古典の意味と意義

高校の国語科の中で古典が扱われる科目は、「国語総合」「古典」「古典講読」である。また、「国語表現I」では、「国語の表現の特色や語句、語彙などを理解するとともに、古典の表現法や、語句、語彙などについても関連的に取り扱う」と古典についてもふれることになっている。

国語総合、古典、古典講読では、古文を読むことの学習のために文語文法の指導が行われるのであり、詳細な読み取りにならないように配慮する必要がある。古典文法の学習は、古文を読むための手段であり、目的自体ではないのである。本論文で扱っている古文における条件表現の確定条件についての学習においても、古典の学習として求められることは同じである。古文の作品を読むために、古典文法を学習するのであるが、古典文法の学習自体は目的ではない。実際に現代日本語で使用する文法体系でもない。古典文法の学習に、多くの時間をさくことは求められていない。

生徒たちは、古文を読むために古典文法を学習し、その中の一つとして、条件表現の確定条件、原因理由、偶然条件、恒時条件を学習する。適切な現代語を探しながら現代語訳をする時に原因理由、偶然条件、恒時条件について詳しく考える機会を得る。そして、その区別を考える時、原因理由と偶然条件の解釈において明確に区別できない場合があることに思い当たるのである。そこから疑問を持ち、考えを進めていこうとするかもしれない。勿論、高等学校で学習する古文では、

確定条件の歴史的成立までの深い内容を学ぶことはないのだが、指導者によりその内容に触れることはあってもよいのではないかと。

古文における現代語訳とは、文語(古語)を現代語に置き換えるだけではない。文語(古語)を現代語の置き換えることは、それほど簡単なことではない。「文語のきまり」である古典文法を理解し、正しく利用しなければ、現代語訳をすることはできない。また、現代日本語に対するきちんとした感覚がなければ、適切な、自然な現代日本語に直すことはできない。勿論、古文とは言い、同じ日本語なのであり、時間を遙かに遡れば辿り着く日本語なのであるから、現代語の知識で理解できるものもある。改めて学習する必要のある言語であることも確かである。

現代語訳をするときは、文章のつながり、前後の関係、いわゆる文脈を考える必要もある。ただ、語句を文語から現代語に置き換えるだけではだめなのである。これは読む能力であり、理解する能力である。また、適切な現代日本語にする必要がある。自分だけが分かる日本語、現代日本語として適切でない日本語に置き換えたのでは意味がない。自身が思考する場合においても、他者に伝える場合にも、適切な現代日本語が必要なのである。個別性の高い現代語訳よりも、汎用性の高い現代語訳の方が、使い勝手がよく、その学習は他者とのコミュニケーションができる日本語を作る一助となるはずである。現代語訳をすることは、日本人としての確かな言語感覚が必要になるのであり、現代語訳をするために、日本語を考えることは「言語感覚を磨くこと」にも結びつくはずであり、意義のあることなのである。これは、古文に限ったことではない。漢文についても言えることである。そういう意味では、古典はただ難しい教材、文章ではなく、総合的な日本語力を育成するものだと言えるはずである。

第五章 まとめ

本論文では、条件表現の確定条件における実際的な問題を通して古文、古典の指導についての考察を行った。高等学校国語の目標は「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」ことである。現代語訳することによって生徒たちは、古文を理解する。勿論、内容の理解については現代語訳をただだけでは不十分な場合もあり、内容を理解することにより現代語訳をするという場合もあるはずである。「古典文法」「現代語訳」「内容理解」は互いに関連しあって、学習が成立するのである。

古典を学ぶことは現代語を学ぶことでもある。古典において確定条件についてしっかり考えることは、思考力を伸ばすこと、言語感覚を磨くことに繋がるということも言えるはずである。

《参考文献》

- ・小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- ・斎藤文俊(1987)「近世における『論語』訓読法の展開—条件表現による分類」『訓点語と訓点資料』77
- ・築島裕(一九六七)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の國語學的研究 研究篇』東京大学出版会
- ・山口堯二(1966)「接続助詞『ば』の確定条件法」『国語国文』35-6
- ・山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館
- ・吉川武時編(2003)『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房